

ヒツモト サトコ

氏 名 **櫃本 聡子**

学位の種類 博士（工学）

学位記番号 博第1211号

学位授与の日付 2021年3月31日

学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当 課程博士

学位論文題目 煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究
(A research on Characteristic of the green tea ceremony room
in illustrated book)

論文審査委員 主査 教授 麓 和善
教授 北川 啓介
准教授 夏目 欣昇
教授 村上 心
(相山女学園大学)

論文内容の要旨

喫茶文化に関する研究を建築史学からみると、抹茶の茶席および関連施設は、数多くの遺構および古典建築書が存在し、多くの先学による体系的研究が行われている。一方、江戸末期から明治・大正期にかけて全国的な流行をみせた煎茶席については、現存遺構が少なく、これに関する古典建築書も確認できない。先学により全国に点在する現存煎茶席遺構の調査研究が行われているものの、これらの遺構からは、同時代の煎茶会において煎茶席がどのように使われたか、その実態を知ることは難しい。本研究では、煎茶の流行に伴って各地で開催された煎茶会に合わせて刊行された茶会記のうち、席の様子を描写した挿図を収録した煎茶会図録（「茗讌図録」とも呼ばれる）を対象史料とし、悉皆的に収集した煎茶会図録の挿図から当時の煎茶会の様子を可能な限り読み取り、平面構成やしつらい、人物の位置を分析・考察し、同時代の煎茶会における煎茶席の空間特性を明らかにした。

第1章「序論」では、既往の研究をまとめ、本研究の目的と研究の方法について述べた。

第2章「煎茶会図録の書誌的考察」では、対象史料の煎茶会図録51本について、各図録の書誌を述べた後、著者および題字・序跋を手掛けた人物、出版地域、出版年代などの書誌的考察を行った。その結果、著者は茶会の主催者であることが多く、その中心は文人から骨董商や政治家、地元の有力者へ広がり、彼らをとおして煎茶文化が全国へ波及したと考えられると指摘した。また、江戸末期から明治初めは書画展覧目録の形式の図録が多い

中で、優れた内容の画期的な図録の存在を指摘し、その後は骨董商の介入により、煎茶道具のカタログ的な図録や写真による挿図を収録する図録が登場すること、多数の図録が出版されている大阪・京都・東京・愛知で特に煎茶が盛んであったことを述べた。

第3章「煎茶会の構成」では、各煎茶会の席の構成を述べた後、席の種類を整理し、席同士の関係性を分析・考察した。その結果、江戸末期は前席と茶席を主とした2席以上の席で構成され、茶事に主眼が置かれていたが、文人の嗜みにちなんだ奏楽席・揮毫席などの多彩な席種が登場し、徐々に道具の鑑賞に主眼が移ったことで単独の展観席が増加し、明治末以降は抹茶席など煎茶席でない席が設けられるようになること、京阪は茶席を主とする構成で、特に大阪は他地域に先駆けて多彩な内容の煎茶会が開催される一方、東京では展観席が大半を占めており、茶事より道具を鑑賞することに主眼が置かれていたことを指摘した。さらに、会場、席主について時代的・地域的考察を行った結果、会場は寺院・社家や個人邸、料亭が多く使用され、楼上から眺望を楽しめる建物が好まれ、各地域の景勝地で特に水辺が好まれたこと、席主は茶会の主催者やその肉親がつとめることが多いが、展観席を中心に骨董商や盆栽商がつとめ、彼らを媒体に煎茶文化が波及したと考察した。

第4章「煎茶席の建築的特質」では、煎茶席の平面構成としつらいについて、挿図から読み取れる煎茶席の平面モデル化を行い、それを基本資料として平面構成の分析と考察を行った。その結果、煎茶席の平面構成は14種類に分類できること、明治前期以降茶事から道具の鑑賞に関心が移るのに伴い、床のみの平面から道具を飾る場である床脇や付書院が採用され、それら自体も独創的意匠が好まれるようになり、大正期の茶事の形式化に伴い、平面も固定化したこと、東京では展観席が多く、道具の鑑賞に重点が置かれたため、床脇や付書院からなる席が好まれた一方、京都では茶事が重視されることから、席の主題を明確に表せる床のみの席が好まれ、大阪は席種も平面構成も多彩であることを明らかにした。

第5章「煎茶席の使われ方」では、煎茶会の道具について目録にある名称を整理し、前章の平面モデルに道具の配置も加え、煎茶席のしつらい、茶席での茗主と客の位置を分析・考察した。その結果、しつらいでは、特に敷物は大きさや敷き方を変化させながら、席中の道具や人物の位置を示したこと、明治後半から抹茶の影響がみられたことを指摘した。

点前座と客座の関係は、床のある茶席で茗主は床前を避け、客が床前に位置し、大半の席で茗主は床を向いて座るという大体の傾向はあるものの、基本的には自由に点前座を配すこと、床の無い茶席では開口部を意識しつつ基本的に自由に点前座を配すこと、こうした自由度のある配置は煎茶独自の道具である可動式の炉（涼炉）が可能にしたと考察した。さらに、客の座り方の変遷について、江戸時代には机を抛り所としたが、明治前期になると敷物で客の位置が指定されるようになり、明治中頃以降は客用の敷物が床を意識した配置をとり、明治末までに客用の敷物と、茗主用の茶具敷が各地で確認できるようになると、最終的には正客を示す煙草盆が加わって茗主と客の配置が確立することを指摘した。

第6章「結論」では、煎茶会図録における煎茶席の空間特性について総括した。

論文審査結果の要旨

喫茶文化に関する研究を建築史学からみると、抹茶の茶席および関連施設に関しては、多くの先学によって体系的な研究が行われている。一方、煎茶席については、現存する遺構が少ないながらも、先学によって煎茶席遺構の調査研究が行われているが、煎茶席がどのように使われたか、その様子を知ることは難しい。そこで本研究では、各地で開催された煎茶会の席の様子を収録した煎茶会図録を対象史料とし、挿図から煎茶会の様子を可能な限り読み取り、平面構成やしつらい、人物配置の分析と考察を行い、煎茶席の空間特性を明らかにしている。

第1章「序論」では、煎茶席に関する既往研究についてまとめ、本研究の目的と研究の方法について述べている。

第2章「煎茶会図録の書誌的考察」では、煎茶会図録51本について、著者および題字・序跋を手掛けた人物、出版地域、出版年代などの書誌的考察を行っている。その結果、著者は茶会の主催者が多く、時代が降るにつれて文人から骨董商や政治家、地元の有力者へ広がり、彼らによって全国的に波及したことを指摘している。また、江戸末期から明治初めは優れた図録が存在し、その後は骨董商により、煎茶道具のカタログ的な図録や写真を収録する図録が登場すること、大阪・京都・東京・愛知で特に煎茶が盛んであったことを明らかにしている。

第3章「煎茶会の構成」では、各煎茶会の席の構成、席の種類を整理し、席の関連性を考察している。その結果、江戸末期は前席と茶席を主とした2席以上で構成され、茶事に主眼が置かれていたが、奏楽席・揮毫席などの多彩な席種が登場し、徐々に道具の鑑賞に主眼が移って展観席が増加したこと、京阪は茶席を主とする構成で、特に大阪は多彩な内容の煎茶会が開催される一方、東京では展観席が大半を占めており、茶事より道具の鑑賞に主眼が置かれていたことを指摘している。さらに、会場、席主について時代的・地域的考察を行った結果、会場は寺院・社家や個人邸、料亭が多く使用され、楼上から眺望を楽しめる建物が好まれ、大阪は青湾の網島、京都は東山の円山近辺や南禅寺界隈、東京は隅田川畔や上野の不忍池（小西湖）と、各地域の景勝地で特に水辺が好まれたこと、席主は茶会的主催者が多いものの、展観席を中心に骨董商などもつとめ、彼らを媒材に煎茶文化が波及したと考察している。

第4章「煎茶席の建築的特質」では、挿図から煎茶席の平面モデル化を行い、平面構成の分析と考察を行っている。その結果、煎茶席の平面構成は14種類に分類でき、明治前期から後期までの間に茶事から道具の鑑賞に関心が移り、床のみの平面から床脇や付書院が採用され、独自の意匠が好まれるようになり、大正期の茶事の形式化に伴い、平面も固定化したこと、東京では展観席が多く、道具の鑑賞に重点が置かれたため、床脇や付書院からなる席が好まれ、京都では茶事が重視され、床のみの席が好まれ、大阪は席種も平面構成も多彩であることを明らかにしている。

第5章「煎茶席の使われ方」では、煎茶会道具について、目録に記載される名称を整理し、第4章で作成した平面モデルに道具の配置も加え、煎茶席のしつらい、茗主と客の位置について分析と考察を行った。その結果、各道具で時代的な傾向がみられる中、特に敷物は大きさや敷き方を変化させながら、席中の道具や人物の位置を示す役割を果たしていること、明治後半以降に煙草盆が客の位置を示すなど抹茶の影響が現れたことを指摘した。そして、点前座と客座の関係は、床のある茶席で客が床前に位置すること、大半の席で茗主は床に向かう形で座り、勝手は意識せずに自由に点前をしていること、床の無い茶席では自由に点前座を配しつつも、開口部を意識していると考察した。さらに、客の座り方について、江戸時代は碁机を抛り所としたが、明治前期になると敷物で客の位置が限定されるようになり、明治末までに客の位置を示す敷物と、茗主の位置を示す茶具敷が各地で確認できるようになると、最終的には正客の位置を示す煙草盆が加わって茗主と客の配置が確立することを指摘した。

第6章「結論」では、各章をまとめ、煎茶会図録における煎茶席の空間特性について総括した。

以上は、日本建築史・日本文化史上の画期的研究であり、建築学上貢献するところ大である。

よって本論文を博士(工学)の学位論文として認める。